



東高だより ーはなみずきー

第2号
(H23.4.22)

「季節外れの落葉」

「秋でもないのになんで今頃葉っぱが落ちるんだ。いい迷惑だよ」そう言いながら生徒が掃き掃除をしていたのを思い出す。5月も近いというのに辺りは落ち葉だらけ。それも落ち葉とは縁遠いはずの常緑樹となると、生徒が文句言うのも頷ける。いったいどうなっているのだ。これも異常気象のせいかな？

落葉樹はその字が示すように、秋から冬にかけてすべての葉を落とす。常緑樹は常に緑と書くので、多くの人が落葉しないと思っている。ところが驚いたことにそうじゃない。常緑樹もやはり1年に1回、4月の終わりから梅雨口にかけて落葉し新しい葉と交代する。

もう少し説明すると、春になり新しい芽が古い葉の間から出てくる。ところがそれを全部ため込んでしまうと、枝葉がどんどん茂って大変なことになる。そこで不要な古い葉が落ちて新しい葉と入れ替わる。そうやって一定量の葉を保つのである。常緑樹の落葉は落葉樹のそれと違って、一気にではなくゆっくり時間をかけて落ちていく。だから生徒が来る日も来る日も掃き掃除に追われることになる。まさに生徒泣かせの常緑樹というわけだ。

常緑樹が葉を落とすのは、なにも葉を一定量に保つためだけではない。葉は水分を欲しがるので、特に厳しい冬などには、生き延びるために負担になる葉を自ら落とし越冬する。それ以外にもある。例えば、移植のために根を切られたりすると、適応するまで厳しい状況が続くので葉を落として命をつなぐ。常緑樹の落葉は、世代交代だけでなく「生命維持」なのである。これも自然の摂理。うまくできている。

これに対し人間はどうであろうか。むかしは「可愛い子には旅をさせろ」と言ったが、今頃そんなことを言う親は少ない。我が子をこれ以上ないくらい大事に育てる。雨が降れば傘になり、雪が降れば外套になり、風が吹けば防風林になる。子供はそういう親の誤った庇護を受けて、ぬくぬくと育てて病弱且つ我が儘になる。常緑樹の落葉ではないが、苦しいときに身を削って生き延びるといふ荒行の経験がないため、困難にぶち当たるとすぐへたる。奢侈に流され安易な道ばかり選択してきたものだから、うまくいかなければすぐに諦め、自分の思いどおりにならなければだだをこねる。見ていて実に恥ずかしい。子どもだけでなく大人にもそういう人がいる。どこかで少し葉っぱを落としてこい。

人は大きくなるために脱皮が必要である。成長するには挫折を味わい苦しまなければならない。プロゴルファーの宮里 藍さんは、単身アメリカに渡り勝てない自分に、日本での自信と誇りを木っ端微塵にされた。やせ我慢しないで日本に帰って来れば、と家族から言われた。しかし、異郷の地で一人歯を食いしばって、いつか勝ってみせると試練に耐えた。それが今の彼女の強さとなってトーナメントに現れている。彼女の強さはゴルフだけではない。人間的にもしなやかで強くなった。インタビューを見ていてそれがよく分かる。常に他者に対する細やかな心配りがうかがえる。惨敗しても嫌な顔一つせず真摯な受け答えに終始する。彼女はゴルフの腕を上げただけでなく、人間としても大きく成長した。私の鼻屑目かもしれないが、そんな彼女に女性としての美しさを感じる。

「前向きに苦しむんだったら、必ず何か得られる」と、先日ある人に言われた。この正鵠を射た言葉に、思わず膝を叩いた。彼女は前向きに苦しんで見事に古い自分から脱皮したに違いない。

常緑樹の落葉は秋の落葉と異なり美しくはない。どちらかといえば迷惑千万で煙たがられる。しかし、落葉の意味を知れば少しは寛大な気持ちになれる。そう「成長」と「前向きに苦しむ」だ。これらのことを考え合わせれば、初夏の落葉もまんざら悪くない。違いますか？ なに？ 集めて焼き芋！ そんな人は脱皮しない方が世のため人のためです。



